

潜在するナチズム

トーマス・ベルンハルトの戯曲『ヘルデンプラッツ』

狩野 智洋

1. 序

『ヘルデンプラッツ』(Heldenplatz, 1988)¹⁾にはオーストリアに於ける現在のナチズム²⁾に対する厳しい批判が込められている。ベルンハルトはそれ以前にもドイツに於いていまだに存在するナチズムを暴露する寸劇集『ドイツの昼食』(Der deutsche Mittagstisch, 1978-1981)³⁾を書いている。両者に於いてベルンハルトはあからさまな表現で現在のナチズムを告発しているが、前者は単に舞台をドイツからウィーン・オーストリアに移して後者を再現したものではない。ベルンハルトは裕福なユダヤ人一家を通して現代のナチズムを描くことにより、『ドイツの昼食』には見られなかったこの問題の新たな側面を明らかにしている。

2. 現代のナチズムに対する批判

2.1. ウィーン・オーストリアに潜在するナチズム

『ドイツの昼食』に収められている寸劇と異なり、『ヘルデンプラッツ』では現代のウィーン・オーストリアに潜むナチズムの存在が劇の開始後まもなく説得力ある形で暴露されるというのではなく、徐々にその説得

1) Bernhard, Thomas: Heldenplatz. Frankfurt a.M. (Bibliothek Suhrkamp 997) 1988. 以下Hと略記。

2) これはいわゆるネオ・ナチの運動を指すものではなく、人々の心に潜む民族主義的・排他的な、ナチズム的思想傾向を指している。

3) Bernahr, Thomas: Der deutsche Mittagstisch. Dramolette. Frankfurt a.M. (Edition Suhrkamp NF480) 1988.

力を増して行く手法がとられている。この手法が用いられた目的を考察しつつ、ベルンハルトの描く現代のウィーン・オーストリアに潜在するナチズム像を明らかにして行きたい。

だがその前に、読者の理解の助けとなるように、この劇の背景をごく簡略に述べておく。

1938年3月15日オーストリアをドイツに併合したヒトラーが、歓声を上げる大勢の群衆に迎えられてウィーンのヘルデンブラッツにその姿を現した。ユダヤ人であるシュースター家の人々は迫害を恐れ、イギリスへ逃れる。著名な哲学者で大学教授のヨーゼフ・シュースターが戦後ウィーン市長の誘いを受け、シュースター家は再びウィーンに戻るが、その直後からヨーゼフの妻ヘートヴィヒが、ヒトラーを迎える群衆の歓声の幻聴に悩まされるようになる。イギリスへの再移住を求める妻の懇願を長年にわたって拒み続けた後、ウィーン・オーストリアに潜在するナチズムへの恐怖から遂にヨーゼフは再移住を決意する。しかし、半年かかって漸くオックスフォードに家を見つけ、いよいよ出発するという矢先、1988年3月のある日⁴⁾、ナチズムに対する恐怖から既にオーストリアに住むこともできず、また最早移住先での生活にも自信を持ち得なくなっていたヨーゼフは、逃げ場を失った絶望感から (H12, 39, 41, 56f., 61f., 75, 110)、アパートの四階にある自宅の窓から身を投げる。劇はその一週間後の葬式の後から始まる。

2.1.1. 第一場

第一場ではシュースター家に長年家政婦として勤め、主人に最も信頼されているツィッテル夫人の口から、故人のヨーゼフ・シュースターの語っ

4) ヒトラーがオーストリアをドイツに併合し、ヘルデンブラッツで演説してから丁度50年めに当たるが、これは半世紀を経た今もまだヒトラーの影響力が厳然として残っていることを暗示している。

た、現代のウィーン・オーストリアに潜在するナチズムに対する彼の恐怖が明らかにされる。従って、観客（読者）はここでは伝聞として、ナチズムの存在を知り得るのみである。

長年にわたって拒否し続けたオックスフォードへの再移住をヨーゼフに決意させたものが、彼のウィーン・オーストリアに潜在するナチズムへの恐怖であることを、ツイッテルの伝える彼の次の言葉が端的に示している⁵⁾。

「ウィーンは今の方が／50年前よりもひどい状況になっていますよ、ツイッテルさん。／娘がつばをかけられたんですよ、ツイッテルさん。／毎日、不安です、ツイッテルさん。／私にはもう耐えられない。／私はもう歳も歳だし、体も弱って、オーストリアでは生きてゆけません。／ウィーンで暮らすというのは非人間的なことなのです。」(H43f.)

しかし、ヨーゼフのこの恐怖がそのまま観客（読者）に受け入れられることはない。それはヨーゼフの性格に起因する。

ツイッテルの語る様々なエピソードが彼の性格を浮き彫りにしている。例えば、ワイシャツの畳み方に異常にこだわる点からは彼の病的な几帳面さが明らかになり(H25ff.)、グラーツではツイッテルを穴蔵のような部屋に泊めておきながら自分は同じホテルの最高の部屋に泊まることや(H18f.) 家族をはじめ他人を顧みることなく「濫用」(H35)する点からは、彼が非常なエゴイストであることが示される。また、サラサーテやグレン・グールドを好まない者はそれだけで信用できず、好む者はそれだけで信用するという彼の態度からは彼の偏った人物判断基準が明白となる(H31f.)。

5) オックスフォードに再移住することを決意したのは妻の為であるということが単なる表向きの理由にすぎないことを、自分の最も信頼するツイッテルに語ったヨーゼフの次の言葉が証明している。「私は最大のエゴイストですよ、とご自分のことをおっしゃったわ。／オックスフォードの教授職が得られたのは私にとって救いでした。／[...]／家内にとってはひょっとしたらこれは破滅かも知れませんがね。／身の破滅かも。／でも私にはどうすることもできない。」(H35f.)

これらのことから、ヨーゼフが極めて偏った人間であることを観客(読者)は把握する。それと、ヨーゼフがこれまで三回にわたって精神科の治療を受けているという事実(H47)によって、観客(読者)はヨーゼフのナチズムに対する恐怖も単なる迫害妄想(Verfolgungswahn)の産物にすぎないのではないかという疑いを持つようになる。また妻のヘートヴィヒが迫害妄想によって悩まされていることも、現代のナチズムの存在に対する観客の疑念を一層強めることとなる。

第一場では、現代のナチズムの存在に対して、観客(読者)は確信を持つどころか、強い疑いを持たされることになる。

2.1.2. 第二場

第二場が始まると間もなく、アンナがウィーンの人々の中に潜在するナチズムを告発しはじめる。

「もうこれ以上ここにはいられない。／目を覚ますと不安に苛まれるの。／今の状況は／本当に1938年の状況と同じだわ。／今のウィーンには38年よりも／もっと沢山のナチがいるわ。／見ててごらんなさい。／どうせひどい末路になるから。／先を見通す頭がなくとも／それくらい理解できるわ。／[...]／あの人達は皆ゴーサインさえ出れば／私達にはっきり敵対する行動を取るようになるわ。」(H62f.)

アンナの台詞の内容はこの後、間もなく登場することになる叔父のローベルトに関する事柄へと移行して行く。つまり、直後に登場する人物の人物紹介を観客(読者)に対して行うのであるが、これが単なる人物紹介ではなく、ある劇的効果を狙ったものであることが後に判明する。

アンナはローベルトに関し次のように述べる。

「おじ様のような人は／窓から飛び降りたりしないわ。／ああいう人は

ナチからも狙われることはないの。／ああいう人は自分の周りで起きていることを殆どいつも無視しているのよ。／絶えず何でも目にして何でも耳にして／そしてその為常に不安を抱いている／お父様のような人だけが危険を被るのよ。／おじ様は全然不安を抱いてないわ。／いまだに人生を楽しんでいる。／でもお父様は自分の人生を楽しんだことはなかった。／おじ様は生まれつき人生を楽しめる人なのよ。／ウィーンには実際のところナチしかいないということすら／おじ様は信じないわ。／[...]／私達はいつも／お父様よりおじ様という方が好きだった。／[...]／お父様が私達にとってあまりに危険だったから。／考える人は昔からももう危険だったのよ。／ベートーベンを平気で聴けるような、疑うことを知らない人の方が／他人から好かれるのよ。／おじ様のお蔭で／私達は子供の頃楽しく過せたんだわ。」(H68ff.) アンナはまた次のようにも紹介している。「お父様は社交界もパーティーも嫌いだったわ。／お父様は自分のことを社交会嫌いで／パーティー嫌いだって言ってたのよ。／おじ様はいつも本当に喜んで／パーティーに行ってたわ。／どんなに嫌悪すべきパーティーでもお構いなし。」(H73)

アンナの上記の台詞からは、自己の殻に閉じこもり、自分の考えに耽り、常に不安を抱いているヨーゼフとは正反対の、社交的で他人を受け入れ、他人に好かれ、常に人生を楽しむ、常識人としてのローベルトの姿が浮かび上がって来る。更にアンナはローベルトがウィーンの人々の心の中にナチズムが潜んでいることを信じないと述べている。これによって、一場でツィッテルの口から伝えられた、ヨーゼフのウィーン・オーストリアに潜在するナチズムに対する恐怖が、より一層現実味のないものと観客（読者）の目に映ずるようになる。それどころか、この台詞はナチズムに対する彼女自身の恐怖を述べた先のアンナの発言をも否定し得る。登場し

たローベルトの、アンナに対する次の台詞もそれに拍車をかける。「お前はまるで変わっとらん。／戦闘的だ。勇敢で戦闘的だ。」(H79) この言葉は、戦闘的な性格故にアンナが、問題にもならないような小さな事柄を殊更大きく取り上げているかのような印象を与える。ローベルトは更に決定的な言葉を吐く。「ある意味では／兄はお前達の母親と全く同様／迫害妄想に悩まされていたのだ。」(H81) 常識人ローベルトのこの台詞は、ナチズムの存在を決定的に否定する力を有している。従って観客（読者）にはヨーゼフやアンナのナチズムに対する恐怖が全くいわれのないもの、妄想の産物と映る。

だがこの台詞を契機に劇の流れは全く逆の方向へと変る。「迫害妄想」という言葉にアンナが激昂し、激しく彼を非難すると、ローベルトは漸くナチズムの存在を認め始める。「お前の言いたいことは分かる。／[...]／ウィーンの間人はユダヤ人を嫌っておるし／これからも嫌いつけるだろう。／永遠にな。／それはわしにも分かっておる。」(H83f.) 年老いたローベルトは安らぎが欲しいということを理由に、ナチズムの問題やノイハウスの新道路建設の問題（後述）に積極的に関することを拒否しつつも、ウィーン・オーストリア全般に関する批判の激しさを徐々に増してゆく。「だが社会主義者はもう社会主義者ではない。／今の社会主義者は根本的に／カトリックを信奉するナチ[国家社会主義者]以外の何ものでもない。」(H97) 「戦後オーストリア人が／戦前にも増して／ずっと意地悪く、その上ずっとユダヤ人を憎悪するようになっていたということは／予想していなかったのだ。／[...]／ウィーンとそもそもオーストリアが／虚偽の巢窟だということを／兄はすっかり忘れていたのだ。／オルガ：／おじ様、それは大袈裟よ。／ローベルト教授：／お前がそんなことを言うのか。／ウィーンの間人が実際どのような者達か／毎日身を以って体験しているは

ずのお前が。／ユダヤ人だという理由で／ほんの二週間前につばを吐きかけられたお前がそんなことを言うのか。」(H112)「ユダヤ人に対する憎悪はオーストリア人の／最も混じり気のない、完全に純粋な本質なのだ。」(H114)「奴等は／本音を言えば／今も50年前と全く同様／わしらを毒ガスで殺したくてしかたがないのだ。／心の中で皆そう思っておる。」(H115)

本来温和で常識人とされるローベルトが、ウィーン・オーストリアに潜在するナチズムを、アンナやオルガが心臓の悪い彼の体を心配するほど激しく、かつ延々と弾劾することで、この問題の深刻さが観客（読者）に印象付けられる。

2.1.3. 第三場

第三場に入ると登場人物はローベルト、アンナ、オルガ、ツイッテル、ヘルタの他に、故人の同僚のリービヒ教授とその妻、故人を崇拜するランダウアー、後に故人の妻ヘービヒと息子のルーカスが加わる。第三場ではシュースター家以外の者たちが加わることにより、ウィーン・オーストリアにナチズムが潜在しているという見解を抱いているのが、決してシュースター家の人々のみではないことが明らかにされる。

「リービヒ教授：ナチが再び権力を握るのは／時間の問題に過ぎません。／あらゆる前兆がそれを示しています。／社会主義者もカトリックの政治家も全てをこっそりナチに引き渡しているのです。／ローベルト教授：／いや、オーストリア人の大半が望んでいること、／即ちナチズムの支配は／いま現に行われておる。／水面下ではもうとっくに／ナチズムが再び権力の座に着いているのだ。／ランダウアー氏：／一夜にして／突如亡霊が生身の強大な男となって現れますよ。／ローベルト教授：（ヘルデ

ンブラッツを見る。) / 将来、もうごく近い将来、ランダウアーさん、／
あなたのおっしゃったことの正しさが証明されますよ。』(H135f.)

この三人の台詞から、ナチズムがウィーン・オーストリアに深く、そして広く浸透していることが示される。そして三人ともアンナと同様、現在はいまだ潜伏している状態にあるナチズムが間もなく公然と姿を表わすと見ている。表には現れない隠されたナチズムの存在を鋭く見抜いたベルンハルトが、劇中で、差別される側に立つ差別に敏感なユダヤ人に確実に見抜かせている。ここに、ベルンハルトが本作に於いて、加害者側のオーストリア人を描かずに、被害者側のユダヤ人を描く理由の一つがあるといえる。ナチズムに対して敏感な劇中のユダヤ人が、加害者側に立つ鈍感なウィーン・オーストリアの観客（読者）にオーストリアの「破滅的な状況」(H99f.) を突き付ける形となっている。

2.2. 観客及び社会に対する挑発

これまで考察した内容からも判るとおり、本作の作劇法は極めて戦略的である。第一場では、現代のウィーン・オーストリアに潜むナチズムの存在をほのめかしながらも、観客に確信を与えることをしない。そして第二場では、当初はアンナにウィーンのナチズムを批判させ、その後同じ口で、社交的で常識人のローベルトがナチズムの存在を認めないということを読者に語り、それにより、ナチズムの存在がヨーゼフやアンナの妄想に過ぎないという期待を観客に抱かせるが、その直後、ローベルトにナチズムを批判させることによって観客の幻想を完全に破壊する。第三場で更にそれに追い打ちを掛ける。

ベルンハルトがこの様な手法を用いたのは、この作品の上演を通じて、直接ウィーン・オーストリアの観客及び社会に強い衝撃を与えようとした

為に他ならない。

更に、ベルンハルトは彼特有の毒舌をいかんなく発揮し、戦後「もっぱらナチスの被害者を装うことに腐心し、そのことによって国際社会における同情を得て、そこに戦後世界を生きる道を見出そうとした」⁶⁾、加害者意識の薄い、「自分達の破滅的な状況に対して／完全に無関心な国民になってしまった」(H100) オーストリア人を挑発する。

彼が現在のナチズム台頭の主犯として先ず槍玉に挙げるのが、政治家である⁷⁾。ローベルトはこう批判する。「このいわゆる社会主義者ども⁸⁾が今日のナチズムを／オーストリアに呼び出したのだ。／このいわゆる社会主義者どもがこの新たなナチズムを／可能にしたのだ。／こいつらはナチズムを再び可能にしたばかりか／呼び出しさえしたのだ。／既に50年もの間もはや社会主義者ではなくなっている／このいわゆる社会主義者どもが／本当にオーストリアの墓穴を掘っているのだ。」(H97f.) リービヒも先に引用したように、「社会主義者もカトリックの政治家も全てをナチの手にこっそり引き渡しているのです」と述べ、政治家の責任を強調している。これらはほんの一例に過ぎず、ベルンハルトは実にしつこいほど、政治家に対する批判を繰り返している。

だが、国民もその責任を逃れることはできない。ローベルトはオーストリア国民を批判してこう述べる。「似非社会主義の背信行為を民主主義と呼んでおる。そこなのだ。／社会主義という言葉はわしにはもうずっと以前から／実に不快な罵言に聞こえるのだ。／その言葉を聞くとナチズムという言葉に覚えるのと全く同じ不安を覚える。／この国の政党全部と／そ

6) 望田幸男：ナチス追求 ドイツの戦後 (講談社現代新書) 1990,S.84.

7) 寸劇集「ドイツの昼食」に収められている「全か無か」(Alles oder nichts, Ein deutscher Akt)でも、1981年当時のドイツ連邦大統領、連邦首相及び外相を彼は痛烈に揶揄している。In:Derdeutsche Mittagstisch. S. 115-146.

8) オーストリアでは社会民主党(SPO)の長期政権が続いている事からこの「社会主義者」を「社会民主党員」と解しても間違いではない。

して根本的にオーストリア人全員が一緒になって／今日自分達の国の墓穴を掘っているのだ。／[...]／だがこの災いに満ちた事象に抗して／何も発言されず何も書かれていないということではない。／[...]／オーストリア人はもはや何も聞かず何も読まなくなった。／つまりオーストリア人は破滅的な状況に関して何か聞きはするがそれに対して何も行わず／破滅的な状況に関して読みはするがそれに対して何も行わないのだ。／オーストリア人は自分達の破滅的な状況に対して／完全に無関心な国民になってしまった。／それがオーストリア人の不幸なのだ。それが彼らの破滅なのだ。】(H98ff.) オーストリアの国民は、政治をチェックしその誤りを指弾するどころか、その無関心により、結果的に政治家と協力してナチズムの出現を可能にしていることになる。

ベルンハルトはまた、国民と政治をつなぐ役目を担うべき新聞を批判する言葉をリービヒとローベルトに語らせる。「リービヒ教授：／[...]／新聞には毎ページ、保証しますが、／そこに印刷されている嘘は除いて、／100ヶ所は間違いがあります。／オーストリアの新聞の編集局は／厚顔無恥な政党色を持つ豚小屋以外の何物でもありません。／ローベルト教授：／どいつもこいつも考えることのできない、従って書くことのできない、／書く資格のない輩だ。」(H121) ここではジャーナリストの無能さと新聞の政党色を持つ点が指摘されている。即ち、オーストリアのジャーナリズムは「全てをこっそりナチに引き渡している」政治家たちを批判する能力もなく、ただ政治家の意見をそのまま読者である国民に伝えることによって、オーストリアの新しいナチズムの出現に加担していることになる。

この読者たる国民と新聞の馴れ合いを、ローベルトの台詞が如実に表わしている。リービヒがオーストリアの新聞の読者の愚鈍さを口にする

ローベルトはこう反論する。「だがこのくずにわしらは毎日毎日／鶴呑みにして馴染んでおるのではないのかね。／わしらがそれに興味を覚え、／そしてそれに惹かれておるからだ。／例えば新チューリヒ新聞よりも／本当のところこれらの馬鹿げた新聞の方が／そのいわばどうしようもない愚鈍さもひっくるめてあなたの興味をひくのを／認めざるを得ませんよ、リービヒさん。／[...]／このオーストリアのくず新聞のどうしようもない低級さが／毎朝わしには必要なのだ。／[...]／この下品な刺激が生きる為には必要なのだ。」(H121f.)

ローベルトの台詞には、オーストリアの新聞の愚昧さと下劣な刺激の持つ魅力に抗しきれない読者の下劣さが浮き彫りにされている。新聞に書かれている内容よりも、センセーショナルな刺激を重視する愚鈍な読者の心理が明らかとなっている。ここではローベルトがオーストリア人の下劣さを共有している点を見逃してはならないが、詳しいことは後程論ずることとし、ここではセンセーショナルな刺激に弱い心が、他人を差別し攻撃する快感にも弱いことを指摘するに留めておく。

上述のように、「全てをこっそりナチに引き渡している」政治家たちと、無能で政党の広告媒体と化した新聞と、無関心な国民が、共同して今日のナチズムを生み出したのである。ベルンハルトは彼の毒舌の才能をいかに発揮し、自分達をナチの被害者であると思い込んでいる、あるいは思い込もうとしている、「愚鈍」で「下劣」なオーストリアの政治家とジャーナリスト及び国民を、即ち全オーストリアを挑発し、その責任を是が非でも自覚させようとしたのである。

その挑発を更に有効なものとしたのが、この劇の時間と場所の設定である。

初演は1988年11月4日、ウィーンのブルク劇場（クラウス・パイマン演

出)で行われているが、作品では1988年3月のウィーンが舞台となっている。実に初演の8ヶ月前である。観客から見ればごく最近の出来事として提示されることになる。ちなみに丁度50年前の3月にヒトラーが初めてヘルデンプラッツで演説を行っている。また、ウィーンを舞台に選んだばかりか、劇中の地名及びホテルやカフェ等の名はすべて実名である。しかもウィーンに住む者にはみな馴染み深い名ばかりだ。その名を聞けば、すぐにその情景が思い浮かぶような場所ばかりで、観客は劇と現実との境界を保つことは殆ど不可能だ。

設定された時間と場所が、自分達の生きている時間と場所に極めて接近している為、観客は否応無しに、自分達のいる現実の世界と劇中の世界を混同することになる。その為舞台上で演じられ、語られる事柄を単なる作り事として済ませることが不可能となる。つまり、ウィーン・オーストリアに潜在するナチズムを現実のものとして受け取らざるを得なくなる。上演前後からウィーン・オーストリアでは、特に政治家を中心として、この作品を巡り大変な議論（と言うよりも大騒動）⁹⁾が起こったが、このことは、観客（読者）がこの劇の内容を単なる虚構として片付けることが出来なかったことを証明している。

観客（読者）に反感を抱かせる事ができたという点だけでも、この作品はベルンハルトにとって大変な成功作だといえる。つぎの引用中の「役者」という言葉を「劇作家」に置き換えても何等差し支えはあるまい。「役者が偉大であればある程／そして役者の技術が高ければ高い程／観客はそれだけ激しく反発するのだ。」¹⁰⁾

9) この騒動に関しては以下の論文の前半に詳しく報告されているので、興味のある方は参照していただきたい。新井瑞穂：劇場としてのオーストリアー「ヘルデンプラッツ」をめぐって— 東京外国語大学大学院「Der Keim」17号 1993 S. 1-11.

10) Bernhard, Thomas: Minetti. In: Bernhard, T.: Stücke 2. Frankfurt a.M. (Suhrkamp, st1534) 1988, S.203-250, hier S.238.

だが、この戯曲が単にウィーン・オーストリアに潜在するナチズムを暴露し、それを批判し、全オーストリアを挑発する為にのみ書かれたと見るならば、この作品の真価を見誤ることになる。この作品には、本作に普遍性を付与する、より深い問題が示されている。それを次節で論ずることとする。

3. シュースター家に見るナチズムの萌芽

オーストリアを批判する一方で、ローベルトは解釈の仕方によっては、オーストリアを擁護しているともとられかねない言葉を語る。「イギリス人にもファッショ的な下地はあるのだ。／それがいつも忘れられている。／イギリス人にもイギリス人のファシズムがあるのだ。／ユダヤ人に対する憎悪は／かつてのオックスフォードにもあったし現在もまだある。／ヨーロッパではユダヤ人はどこへ行っても全く同じだ。／どこでも嫌われておる。」(H90) ローベルトのこの台詞は、ウィーン・オーストリア以外にもユダヤ人排斥主義があることを示しており、事実即した内容ではあるが、この台詞の示唆する深い意味を今後明らかにしたい。その為、シュースター家の諸問題を論じることとする¹¹⁾。

3.1. ノイハウスの新道路建設問題

第二場では、ローベルトがナチズムを激しくかつ延々と批判し始めると、アンナのナチズムに対する批判はまるで彼のナチズム批判の呼び水に過ぎなかったかのように鳴りを潜める。一方で彼女は、自分達の土地を横

11) ミッターマイヤーは『ヘルデンブラッツ』に描かれたシュースター家の人間模様を、ベルンハルト全般に特徴的なものであるとし、この戯曲の中で占めるその意味も考察せず、ただ申し訳程度にヨーゼフとローベルトの性格のごく一部を比較しただけで片付けている。この様な浅薄な読み方ではこの戯曲の持つ本来の意味を明らかにすることはできない。Vgl. Mittermayer, Manfred: Thomas Bernhard. Stuttgart (Metzler SM291) 1995, S.175.

切る形で建設が予定されているノイハウスの新道路建設阻止に向けて、働きかけをするようローベルトにしつこく依頼する。これは第三場に入っても続く。ここでアンナに何等かの役割が与えられていることは明らかである。

アンナがローベルトにさり気なく、ノイハウスでの新道路建設の計画を話題にし、彼がそれを阻止する為に何等かの手段をこうじてくれたかどうか探りを入れる場面からこれは始まる(H76)。そしてアンナが計画に反対するのは、ノイハウスにある自分達の地所を守る為、有り体に言えば地価が下がるのを防ぐ為であり(H77,118f.)、その為ローベルトの政治力を利用しようとしている(H77,86)点が明らかとなる。一方、何よりも安らぎを求め、敵を作ることを是が非でも避けようとしている年老いたローベルトは(H79)、アンナの要請を頑として聞き入れない。

ローベルトのこの頑固さがアンナ自身に関する問題を次第に明確にしてゆく。アンナはローベルトの決心を変えようとし、身内である自分達に対する義務や故人であるヨーゼフの気持ちを引き合いに出し(H78)、ノイハウスの将来や景観を口にし(H85,119)、母親の無力を述べ(H118)、また時折、ローベルトの政治力や人扱いのうまさに言及して彼の機嫌を取る(H77,86,142)等の手段で、とにかくローベルトに自分達の書く抗議文にサインだけでもさせようとする(H78,85,118)。

ノイハウスの景観を守る為等と様々な理由を付けながらも、実際は自分達の土地を守る為に、新しい道路の建設阻止に向けて是が非でもローベルトの政治力を利用しようとするアンナの姿勢は、「退官前」(Vor dem Ruhestand, 1979)の元ナチ親衛隊で、ナチの復活を望む¹²⁾裁判長ルドルフ・ヘラーが自然保護をたてに、その実自宅の窓からの展望を守る為にの

12) Bernhardt, Thomas: Vor dem Ruhestand. In: Bernhard, T.: Stücke 3. Frankfurt a.M. (Suhrkamp, st1544) 1988, S.7-114, hier S.110f. 以下S3と略記。

み、自らの政治力を駆使して化学工場の建設を阻止し、他の地域に建設予定地を変更させたこと (S3,58ff., 70f., 92) と共通している。両者とも自らの利益や偏った思想の為に、政治を利用し、法を利用したナチと同じ根を持っている。また、相手の自尊心をくすぐる一方で脅しをかけるアンナの露骨なやり方は、ナチがかつて自国民に対して取った方法と本質的に同一のものである。ノイハウスの新道路建設問題は、ナチズムを激しく批判するアンナが正にそのナチズムと同質のものを有していることを明るみに出している。

3.2. ナチズム批判に現れる偏見と差別

他ならぬウィーン・オーストリアの反ユダヤ主義を非難するアンナの言葉の中に、彼女自身の偏見と差別意識が現れている。第二場の冒頭で、同僚らの中に隠されているナチズムを批判したアンナは、その後次のような台詞を吐く。「同僚達がどれほど馬鹿げているか／あなたには想像もつかないわ。／館長には我慢ならない。／[...]／ザルツブルクかチロルの出身よ。／[...]／大学教授もまた馬鹿ばかり。／お父様は二十年もそれに悩まされ続けたわ。／シュタイアーマルク出身の間抜けとザルツブルク出身の馬鹿が／同僚だったんだから。」(H65f.) この台詞には明らかに地方出身者に対する侮蔑的な態度と偏見が読み取れる。

この態度は、アンナ以上に激しくウィーン・オーストリアのナチズムを批判するローベルトの台詞にも見受けられる。だが、彼の場合問題はより深刻である。ローベルトはヨーゼフの同僚に対する批判から始め、オーストリアの大学全体に対する批判へと移行しつつ、自らの偏見と差別意識を露呈する。「この国の大学では／最も重要なポストがチロルとザルツブルクのナチどもに占められていることを考えると／ただもう恐ろしいとしか

言い様がない。／高山系の愚鈍さが今日では説き勧められておるのだ。／
[...]／以前は大学の教師と言ったら上流市民の出だった。／上流市民のユ
ダヤ人だった。／今ではわがままに育った下層市民の労働者階級と／少し
頭の弱い農民階級の出だ。／恥ずべき状況だ。」(H147) ローベルトのこの
台詞には、彼の地方出身者に対する偏見のみならず、いわゆる社会の下層
階級に対する、「反プロレタリア主義」とも言うべき差別意識がむき出し
になっている。優れた上流社会のユダヤ人に対し、劣等な下層社会の労働
者・農民といういわれのない偏見がある。これはまた彼の上流意識の現れ
でもある。上流階級に生まれたことが自分達にとって生涯の重荷となった
という彼の言葉(H92)とは裏腹に、ローベルトが自分の上流階級の出自と
その精神的・経済的・社会的優位性を強く意識し、かつ重視していること
が理解できる。自分達の優位を守ろうとする意識を持つ者が、その優位を
脅かす者、或は奪った者に対し、条件さえ整えば攻撃を仕掛け、排除しよ
うと試みることは、ナチズムを始め様々な反ユダヤ主義を見ても明らかで
ある。要するにローベルトもナチズムにみられる要素を持っているのであ
る。

3.3. ルーカスとニーダーライター

ノイハウスの新道路建設問題がアンナとナチズムの共通点を暴露したよ
うに、甥のルーカスと女優のニーダーライターの交際がローベルトのさら
なる偏見と差別意識を明らかにする。

第二場で初めてルーカスとニーダーライターに関して言及する際には、
ローベルトは自分が女優という職業に対し何等偏見を抱いていないと言う
印象を与える。「ルーカスはどうして／いつもこの様な手合いばかり相手
にするのかの。／女優に、バレリーナに。だがそんなことは別に構わん。

／お前達の母親もかつては女優だった。」(H95)

だが第三場に入り、ニーダーライターを彼女の家まで送って行った義姉と甥のルーカスに待たされるうちに、ローベルトの女優に対する偏見と差別意識が剥き出しになって来る。「ニーダーライターという女は／労働者階級の出で／芝居の学校へ行ってそれから身を持ち崩した。／甥のルーカスはいつもこんな怪しげな女どもにばかりうつつを抜かしておった。／良家の子息というものはいわば／多かれ少なかれ以前から／芝居の犠牲者になっておったのだ。／女優の手に落ちたのだ。／舞台に。ブルクテアターの舞台にも。／瞬間瞬間に。／その一瞬の時間の中に貴族は逃げ込んだのだ。／決して珍しいことではない。」(H123f.)この台詞にもローベルトの労働者階級に対する侮蔑と反感が現れている。女優がかつては高等淫売を兼ねていたことを暗に示しつつ、上流階級の子息が下層階級出身の女優の犠牲となるよう定められているかのような語り方で、ローベルトは罪のない上流階級の若者に対し、それを誑かして陥れる罪深い、危険な下層階級のふしだらな女優と言う印象を同席した者たちに与えようとしている。

待たされる時間が長くなるにつれていよいよ不満の募るローベルトの次の台詞は、上記の台詞と併せて、ローベルトの女優に対する偏見が近代ヨーロッパの反ユダヤ的人種理論に極めて類似していることを明らかにする。「あのニーダーライター嬢は／お前達の弟と結婚し／シュースター家を最終的に破滅させるだろう。／それも有り得る。／あのニーダーライター嬢が／全てを破壊してしまうのだ。／今に分かる。」(H132)「あのニーダーライター嬢は／ルーカスをめちゃくちゃにするだろう。／あれはルーカスを破滅させる。／女優はどの家系をも／破滅に追いやって来たのだ。」(H133) 下層階級の女優が上流階級を破滅に追いやる定めにある、つまり、下層民の女優は上流階級にとって極めて危険である、とするローベ

ルトの主張は、世界最高の人種であるアリアン人種は自分達自身の滅亡を防ぐ為には、ただ他の民族の成果や文化を盗み、搾り取るだけの劣等な民族であるユダヤ人の力を絶滅しなければならないとする、ナチズムにも受け継がれた近代の反ユダヤの人種理論と、その骨子は全く軌を一にするものである。

女優に対する偏見と差別意識を有する点では、兄のヨーゼフもローベルトと同様である。ヨーゼフの場合はこの偏見と差別意識が単に心の中の問題に留まることなく、実際の言動や態度に現れているが、その問題を以下に論じようと思う。

3.4. シュースター教授夫妻

ヨーゼフがウィーン・オーストリアに潜在するナチズムの恐怖に追い詰められ、自ら命を絶ったのに対し、妻のヘートヴィヒは50年前のヘルデンブラッツの群衆の叫び声の幻聴に長い間悩まされ続け、劇の最後で昼食を取っている最中に再び幻聴が聞こえ出し、体を硬直させてテーブルの上に前のめりに倒れて事切れる。この点に限って言えば、夫のヨーゼフも妻のヘートヴィヒも同様にウィーン・オーストリアのナチズムの犠牲者であるが、事はそれ程単純ではない。この点を明らかにする為、この夫婦の関係を検討したい。

この劇が始まって間もなくツイッテルの口から、この夫婦に関する最初の台詞が語られる。「奥様は孤独な方よ。／先生は奥様にはいつも冷たかったわ。／君にはどうしようもないことでも／君の母親が女優だったことは／私には勘弁ならないのだ。／先生はよくおっしゃったわ。」(H15) ここにはヨーゼフの女優に対する嫌悪感が明言されているが、実は妻のヘートヴィヒ自身も女優だったことが後にローベルトの口から明か

され(H95)、ヨーゼフが妻を冷遇する理由が、彼女がかつて女優をしていたことに起因していることが分かる。

また、ローベルトの女優に対する偏見について論じた際にも触れたように、ナチズムにも殆どそのままの形で引き継がれた近代の反ユダヤ的人種理論の特色は、「個々の人種の〈性格〉を永久不変の〈運命〉とみる点にある。そこには進化もなければ、神の恩寵もありえない。劣等で有害な人種は、いかに努力しても向上することはできない。ゆえにユダヤ人を解放したことは、ただ宿弊を深刻化しただけの悪事である」¹³⁾とする点にあるが、妻に対するヨーゼフの見解にも同様の性質がみられる。「先生は奥様に向かってしつこく、君はヒステリックな人間だ、っておっしゃってたわ。／リンツに生まれたことを考えただけでぞっとする。／[...]／家内は救われる見込みのない人間です。／死ぬほど不幸な。／決して生まれるべきではなかったのだ。／決して生まれるべきでなかった人間は実に大勢いるのです。／こうした人々と付き合うには慎重でなくてはなりません／彼らが全くそうさせてくれないのです。／[...]／この人々は全ての人間と全ての事物をいつもだめにしてしまう。」(H15f.) ここではヨーゼフが妻のヘートヴィヒを単に劣等な、不幸な人間として見ているばかりか、ヨーゼフをも含めた全てのものをだめにしてしまう危険極まりないものだと見ていることが分かる。

ヨーゼフは彼の反女優感情と性格の不一致(H72f.)、及び反ユダヤ的人種理論に極めて類似した、妻に対する彼の見方から、妻のヘートヴィヒを嫌い、冷遇しているのである。そしてまた、ヨーゼフが妻の意向を完全に無視していたことが様々な登場人物の口から語られているが(H29ff.,62,72f.,109)、それがヘートヴィヒを徐々に死へと追いやって行

13) 村瀬興雄(責任編集):世界の歴史 15 ファシズムと第二次大戦 中公文庫 385f.

く。

ヘートヴィヒは、オックスフォードからウィーンへ戻ろうとするヨーゼフに強硬に反対するが、彼は妻の意見を頑なまでに拒んだことをローベルトが伝えている。「55年に兄は／再びウィーンに戻るという考えに／固執していた。／まるでその考えに取り憑かれたようだった。／[...]／お前達の母親はずっと反対していた。／[...]／またウィーンに戻るなんて／思いもありませんわ。／ウィーンの人達はあなたを卑劣にも放り出したじゃありませんか。／だって大学の同僚の人達のことだけでも思い出してごらんなさいな。／皆ユダヤ人排斥主義だったじゃないですか。／そう何度もくり返し言っておった。／兄は彼女の言うことに耳を貸さなかった。／[...]／ウィーンで私達を待ち受けているのは恐ろしいことだけですわ。／見てごらんなさい、ローベルトさん。これが私達の終わりになりますから。／お前達の母親は全てを予測しておった。」(H109)

ウィーンのナチズムを恐れ、ウィーンに戻ることに強く反対する妻の気持ちを完全に黙殺したヨーゼフは一家を引き連れウィーンに戻るが、彼は尚も妻を無視し、更にはローベルトの忠告をも無視してヘルデンブラッツの見える建物の四階に居を構える。「だがグリーンツィングとジーファリングにも／家が提供されていたにもかかわらず／選りに選ってヘルデンブラッツの向い側に／家を買ったことが／既に間違いだったのだ。／わしは一区に住むのはやめろとすぐに説得したんだが／兄は聞き入れなかった。／お前達の母親が／この呪わしい決定の最初の犠牲者だった。」(H80)「彼女はこの家に／激しく抵抗した。／だがヨーゼフはまるでこの家に取り憑かれたようだった。／ここなら大学に近い、とな。／既に引っ越すとすぐ／彼女は早くもその日に最初の発作に襲われた。」(H138)

激しく反対し、激しく抵抗する妻の意向を完全に無視し、取り憑かれた

ようにウィーンに戻り、取り憑かれたようにヘルデンブラッツの向かいの建物に居を構えたヨーゼフは、ナチズムの恐怖に苛まれる妻の気持ちを尚も無視し続ける。

ウィーンに住んでから迫害妄想に悩まされ続けたヘートヴィヒが、現在住んでいる家を手放すよう懇願してもヨーゼフは首を縦に振らない。ツイッテルはその様子をこう述べている。「食堂に入ったとたん／ヘルデンブラッツの叫び声が聞こえて来たんだから。／この家を手放して下さい。／奥様は何度も先生にお願いなさったわ。／[...]／君の耳にヘルデンブラッツの叫び声が聞こえて来るというだけで／この家を手放すわけにはいかんのだ。／先生は何度もそうおっしゃったのよ。／そんな事したら私はあのヒトラーに2度／自分の家を追われることになるんだ。」(H29,vgl.30f.) 迫害妄想に悩まされ、現在の家を手放すよう求めるヘートヴィヒの要求を、ヨーゼフはヒトラーに2度自分の家を追われることになることを理由に退けているが、自分がナチズムの恐怖から逃れる為にオックスフォードに再移住する決心をした点を考慮すると、この理由は説得力がない。寧ろ、妻の要求を拒む為に、ヒトラーを利用したと考えられなくもない。いずれにせよ、30年以上にわたって迫害妄想に悩む妻を見殺しにして来たヨーゼフの妻に対する仕打ちは、正に迫害と言っても過言ではない。

ナチズムを恐れてウィーンに戻ることに反対し、ヘルデンブラッツの見える住居への入居に抵抗し、迫害妄想からくる幻聴に悩まされ続けた妻の意見や懇願をことごとく無視し、それどころか彼女を苦しめる方向へと事を運んできたヨーゼフは、結果的に、正にナチと結託して妻を死に追いやったのである。劇の始めに被害者として提示された登場人物が、劇の終わりには、妻の死により、加害者となった。被害者であると同時に加害者

でもあるというこのヨーゼフの姿は、「ナチスによって支配されたという
かぎりでは被害者であったが、ナチス軍の一翼としてバルカン方面などで
戦ったという点では、ナチスの共犯者、とりわけバルカンの諸民族にとっ
ては加害者であった」¹⁴⁾ オーストリアの姿と重なるものがある。だがこの
夫婦の場合、ユダヤ人の夫が、相手が気に入らないという理由で、同じユ
ダヤ人の妻を迫害し続けたという点で極めてグロテスクなものになっている
¹⁵⁾。ここに於いて、ナチズムが単にドイツ・オーストリアにのみ見られ
た一時的な不幸ではなく、ナチズムのかつての被害者であるユダヤ人にも
見られる普遍的な問題である事が明らかとなる。ベルンハルトが本作で裕
福なユダヤ人一家を描いた本来の目的は、それによってナチズムの普遍性
を明らかにし、警鐘を鳴らすためである。

4. 結語

本作がウィーン・オーストリアに潜在するナチズムを告発する為だけに
書かれたならば、『ドイツの昼食』同様寸劇もしくは寸劇集という形にな
らざるを得なかったであろうが、そうならなかったのはこの作品が単なる
告発以上のものを意図していたからに他ならない。本作のアンナやローベ
ルト、そしてヨーゼフの言動は、民族主義と人種差別に代表されるナチズ
ムを激しく非難する者も、また自ら差別に苦しんだ者も、結局は自分も同
じ要素を持ち、差別する側にまわることを如何ともし得ないことを示して
いる。つまり、被害者であると同時に加害者でもある。世界各地に頻発す
る民族紛争は本質的にナチズムと何等変るところはない。正に「ゴーサイ
ン」さえ出れば、世界の至るところでナチズムが噴き出し得る。人類が続
く限りナチズムが世界から消滅することは決して有り得ない。これは、ナ

14) 望田幸男：ナチス追求 S.84.

15) この図式はイスラエル国内に於けるエチオピア系ユダヤ人に対する差別問題を連想させる。

チズムを生み出し、助長させた責任からドイツやオーストリアを解放するものではなく、寧ろその責任を人類全体に永遠に負わせ続けるものだ。ナチズムが一時的な現象で、それ以前には存在したことがなく、今後根絶し得ると考えるならば、それは正に「馬鹿げた考え」(H165)と言わざるを得ない。「人間をこの世から追放しない限り／世界を改革することはできない」¹⁶⁾と世界改革者は言うが、人間という下劣な種が減びない限り、ナチズムが減びることはない。人類は自分達が滅びる最後の瞬間まで、自分達一人一人の中に潜在するナチズムを常に監視し続ける義務と責任を負う。

16) Bernahrd, Thomas: Der Weltverbesserer. In: Stücke 3, S.115-190, hier S.177.

Der verborgene Nationalsozialismus

— „Heldenplatz“ von Thomas Bernhard—

Toshihiro Karino

In dem Stück „Heldenplatz“ bringt Thomas Bernhard den in den heutigen Österreichern verborgenen Nationalsozialismus ans Licht und wirft ihnen ihre totalitäre Gesinnung heftig vor, vor allem den österreichischen Politikern und Zeitungen. Aber diesen Vorwurf macht er nicht nur den Österreichern, sondern er versucht zu zeigen, daß sich Nationalsozialistisches im Herzen jedes Menschen verbirgt.

Der Plan der Stadt Neuhaus, eine neue Straße quer durch den Besitz der Familie Schuster zu bauen, stellt Nationalsozialistisches in Anna bloß. Wie die Nazis ihre Nation, so versucht auch Anna, politische Beziehungen ihres Onkels Robert, zugleich schmeichelnd und drohend einzusetzen, um den Plan scheitern zu lassen. Gerade Anna und Robert erliegen selbst in ihren Ausfällen, die Österreichern ihren Nationalsozialismus vorwerfen, daß sie auch gegen die Leute vom Lande, Bauern und die Arbeiterklasse nationalsozialistische Vorurteile haben. Robert und sein verstorbener Bruder Josef hassen und diskriminieren den Typus der „Schauspielerin“ so, wie die Antisemiten mit ihren Rassentheorien die Juden diskriminierten.

Die Worte der Figuren, besonders die Roberts und der Wirtschaftlerin Zittel, deuten an, daß Josef, der seine Frau Hedwig, selbst Exschauspielerin,

haßte, sie schlecht behandelte und in den Verfolgungswahn und letztlich zum Tode trieb. Gerade Josef, ein Jude, der einst von den Nazis verfolgt worden war, verfolgte seine Frau, eine ebenso von den Nazis verfolgte Jüdin und tötet sie schließlich.

Das Stück zeigt, daß wir alle in uns unseren eigenen Nationalsozialismus haben, und daß wir uns dieser Bürde bewußt sein müssen, solange es die Menschheit gibt.

(朝日カルチャーセンター講師)